

銀杏

発行所

〒792-0835
新居浜市山根町8番1号
曹洞宗瑞應寺専門僧堂

編集発行 瑞應寺

電話(0897)41-6563
FAX(0897)40-3127毎月1日発行
(振替 01330-2-31918)
瑞應寺

印刷所 東田印刷株式会社

碧巖録物語独語【二十二】

後堂 門原 信典

第十九則「俱胝一指頭」寐語③

【所以道、如斬一縷糸、一斬一切斬。如染一縷糸、一染一切染】

【所以に道う、一縷糸を斬るが如し、一斬一切斬。一縷糸を染むるが如し、一染一切染】

縷糸とは、粗麻を續いだ糸の事だそう。一束の糸。束ね

ている所を切断すれば糸は一本一本バラバラになってしまう。

一か所を染めれば全部一色に染まってしまう。

禅学大辞典には「縷糸はもえぎ色に染めた糸の事で迷妄の根源である煩惱の事」とありますが、ここでは粗麻を續いだ一束の糸の事として読んでいきます。

【無数のつつかい棒】

島根県安来市出身の陶芸家河井寛次郎さんは、陶芸のほか、彫刻、デザイン、書、詩、詞、

随筆などの分野でも作品を残されています。

お亡くなりになる直前に遺した「響応不尽」という詩があります。

「無数のつつかい棒に支えられている生命。

時間の上を歩いている生命。自分に会いたい吾等。

顧みれば、あらゆるものから歓待を受けている吾等。

この世にお客様に招かれて来ている吾等。

見尽くせないほどのもの 食べきれないごちそう。

このままが往生でなかったら、寂光浄土なんかどこにあるだらう」

皆さんはどう読めますか？

それぞれに味わっていただきたいところですが、「無数のつつかい棒」が「一束の糸」です。つつ

かい棒も、糸の数も無限です。

みんな豊かな生命に包まれて生かされているのです。

二塵拳こつて大地収まり」その収まっている大地とは何でしょう。

二即一切」「一切即二」と云う禅語がありますが、「私」を生きて

いるのは「私の身心」であり、その「私の身心」を支えているのは、

太陽、水、空気、山川草木も含む一切の生命・時間・空間・出会い

です。以前より私は「無限」と表現していますが、「二切」も同じ、

一本一本の無限の糸が「私」です。

【選佛場】

そして、この一束の糸の一点を染めればあつという間に全て同じ色に染まってしまう。どんな色に染めるか。圓悟禪師は、

私達が佛行を实践すると束ねた糸の一本一本が立ちどころに佛色に染まると云われるのです。

作佛と云いますが、字書には「作り佛」とありましたが、佛像を作り出すことですが、作佛の修行とはみ佛様がこの私の身心を佛様に作りあげて下さる事です。

瑞応寺の僧堂には月舟禪師が揮毫された「選佛場」の額が掲げ

てあります。

僧堂はみ佛様がみ佛様を選ぶ出す道場です。私達が坐禅出来る事がみ佛様に選

び出されている証拠です。それが一束の糸であり、坐禅という「第一義」があつてこそ、全ての行いがみ佛様の

行いになるのです。坐禅が全ての糸を佛色に染めるのです。

【焼香】

私は葬儀の際に、短い時間ですがいろいろ説明させていただ

きます。

葬儀社の司会の方が「お別れの御焼香」とご案内されます。

何故焼香がお別れに成るのか？何故焼香するのでしょうか？

「香」は五供養の一つで、一般的に「香」「花」「灯明」「水」「飲食」の五つのお供え物の事です。

これらは「五供」とも呼ばれ、先祖供養の基本です。その中の「花」はみ佛様の慈悲、「灯明」は智慧を表します。

そして「香」は道場を浄らかにするのが目的ですが、み佛様の教えそのものです。梅花流詠賛

歌の追善供養御和讃の四番に「まいらす香に包まれて」という歌詞があります。み佛様の教えがどんな人でも、どんな所でも煙のように隅々まで行き渡り、

包み込んで身心共に浄らかに成るのです。香は消臭剤でも芳香剤でも無いのです。

浄らかにするというのは善い香りも悪い匂いも包み込む、ここが大切です。

悪い匂いだけを消してしま

のではないのです。是非、善悪、正邪、曲直、都合の良し悪し、

好き嫌い、即ちあらゆる葛藤を

み佛様の教えが包み込むのです。葛藤からこそ生き生きとした豊かな生命が生まれてきます。

葬儀の時の御焼香は、故人と共にみ佛様の教えを頂きますという誓願です。

【願わくは我等と衆生と皆共に佛道を成ぜんことを】

「正法眼蔵八大人覺」に次のお示しがあります。

「聞思修を起こすを智慧といふ」「聞思修」とも云いますが、「證」は悟り、菩提という意味です。昔からの歌に「耳に聞き心に思い 身に修せば いつか菩提に入相の鐘」というのがあります。聞いただけではない。思

うだけではない、この身に修める。これが私達の願う成佛、成佛道です。

「入相の鐘」というのは夕暮れの鐘です。太陽が山や地平線や海に沈んでいく様子を表しています。み佛様の世界に沈んでいく、入っていく。つまり「菩提に入」と「入相の鐘」と言葉をかけてあるのですが、此の「入相の鐘」は聞く人全てを佛道に導く鐘の音です。そこに誓願が無ければならず、さらに佛道を身に修めなければ「入相の鐘」になりません。鐘の音はみ佛様の声、ですからみ佛様に私を修めていただくのです。そして私達はあくまでも、衆生とみな共に

み佛様に導いていただくのです。

【聖諦第一義】

これも前回の武帝と達磨大師の問答に出てくる言葉です。

右の手と左の手を合わせる合掌の姿。この動きが「一」つまり「第一義」です。「一線糸」です。真諦と俗諦と云う言葉があります。真諦はみ佛様の事、俗諦はいつも迷っている私達。凡夫である私がみ佛様の行を修めるのです。

皆さんもお聞きになったことがあると思いますが、合掌を説明する歌に「右佛 左我と合わす手の 中ぞ尊き 南無の一声」とあります。この合掌の姿が「聖諦」です。合わせた手は右の手でもあり、左の手でもある。右だけ左だけと言えません。合掌こそみ佛様のお姿、おろそかにできません。それが坐禅の姿です。一光老師は「右の足を左のものの上に置き、左の足を右のものの上に置く、不二一体となつて、右とも左ともいえない。どちらでもあつて、どちらでもない。右は右で、右を超え、左は左で左を脱落する」とお示しでした。聖諦とは葛藤を包み込んだ「一」の姿です。み佛様の眼から見れば、どんな人でも、辛くても悲しくても、真諦も俗諦も無く、みんな聖諦です。俱胝和尚は、それを一本の指で示されました。

(続く)

「のど仏」の謎

仏舎利・ギリシャ神・アダムのリング

高岩寺 来馬明規

東京巣鴨とげぬき地蔵尊高岩寺住職・医師・医学博士
東北福祉大学客員教授 日本禁煙学会役員

先月まで三業「身・口・意」の口に注目し、「舌の正しい位置」や「あいうべ体操」のお話をしました。今回は「のどの仏さま」のお話をしましょう。

【のどに仏さまがいる?】

のどには「のど仏」と呼ばれる小さく硬い出っ張りがあり、発声や飲食で上下に動きます。なぜこの出っ張りが「のど仏」と呼ばれ、「仏さま」がのどにいらつしやることになったのでしょうか?

「のど仏」の話にたどり着くために、まずは背骨とギリシャ神話に登場する神様の話からはいりましょう。

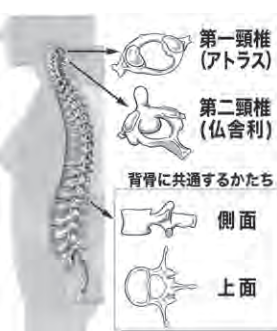
【背骨の話から】

私たちの背骨は、頭につながる一番上の第一頸椎から尾椎(尾椎)まで、三〇個ほどの骨が、一列につながつて体を支えています(図1)。ひとつひとつの骨は、食卓で見かける魚の骨にそっくりです。体重を支える円柱の部分の後ろに、竜の背のような突起が左右と後につき、骨の輪の中を脊髄が通ります。背骨のひとつひとつに大小はあります

が、いずれも共通のかたちをしていることがわかります。

ところが、頭がい骨に連なる一番上の背骨(第一頸椎)とその次の背骨(第二頸椎)は、かたちが大きく異なり、特別な名前がついています。

図1



【第一頸椎はギリシャの神さま】

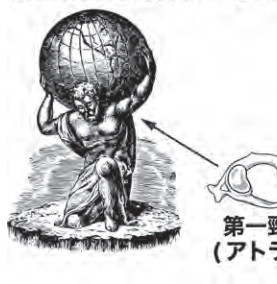
頭がい骨を直接支え、安定を図る第一頸椎は「輪状」で、まるで丸くて重い頭がい骨の転落を防ぐようなかたちをしており、「環椎」の和名があります。頭がい骨を大きな丸いヤカンに見立てると、ワラで作ったなべ敷きのような印象です(図2)。

さて、十六世紀の解剖学者ヴェサリウスは、第一頸椎をギリシャ神になぞらえ、「アトラス」と名付けました。アトラスはギリシャ神話

に登場するチタン神族の巨人ですが、ゼウス率いるオリンポス神族との戦いに敗れ、罰として西の果てで天空を支えるように命じられた神です。ヴェサリウスは天空を地球に、地球を頭がい骨に見立て、頭がい骨を支える小さな第一頸椎をアトラスに擬えたのです。地図のことを「アトラス」と呼ぶのはこのためです。

図2

天空を支える神アトラス



頭がい骨



【第二頸椎は仏さま】

そして第二頸椎も独特のかたちをしています(図3)。「歯突起」と呼ばれる、前歯のような突き出しが真上に出て、第一頸椎の輪に嵌まっています(図6)。歯突起

を中心に、第一頸椎がくつついた頭がい骨が回転することから、第二頸椎は「軸椎・アキシス」とも呼ばれます。実はこの第二頸椎が「仏舎利」と呼ばれる「ほとけの骨」です。それは昔の人々が歯突起をほとけの頭に、環状の部分を両手で合掌したすがた、あるいは坐禅の足組み(結跏趺坐)に見立てたからです。火葬した遺体から仏さまがออกมาしにられた、としてたいそう大切にしていたのです。

図3

第二頸椎(仏舎利)



【のど仏と第二頸椎とを混同】

一方、「のど仏」は「喉頭」の一部を構成する「甲状軟骨」で、頸椎でも仏舎利でもありません。しかも骨になる一歩手前の柔らかい軟骨

ですから、火葬すると灰になって消えてしまいます。

ところが、立体的な私たちの体は、火葬されると遺骨と遺灰が平面上に並びます。火葬によってからだの各部分の前後関係は失われ、のど仏は焼失して認識出来なくなります。そしてのど仏から5センチほど頭よりの位置から現れる「仏舍利(第二頸椎)」をのど仏と誤解してしまったのです。



図4

右の画像はヒトの頭と首のCTスキャンで、正中線の断面を観ています(図4)。「のど仏」の後ろ、かつ上の方に仏舍利があり、頭がい骨を支えていることが分かります。

私は、葬儀の導師をつとめる時に、火葬中の控室で遺族に骨模型を供覧しながら、上述のような仏舎利の意味を説明し、そのうえで収骨に臨んでいただ

いています。残念なことですが、火葬場では環境対策として、従前よりも高い温度で火葬することになっており、高齢者では完全なかたちを保った仏舍利が出にくくなっています。

【のど仏はアダムの特徴】

さらに、のど仏は西洋の文化からも注目されてきました。『旧約聖書』の「創世記」に登場する最初の人間、アダムとイヴがエデンの園でへびに騙され、食べてはならない「善悪の知識の木の実」を食べてしまいます(図5)。

木の実実はアダムスのノドにつかえ、ノドの出っ張りになりました。我々が「のど仏」と称するところは、西洋の言語で「アダムのリング」と呼ばれています。のど仏は、ユダヤ・キリスト教文化における最初の人間・アダム、身体的特徴になっているのです。



図5

【まとめ】

「仏さま」はのどにはいません。その後上方にある「第二頸椎」が仏さまです。しかも、それぞれの特徴的な形状によって、仏さまの上にはギリシャ神話のアトラス神がいっぱしやり、仏さまと間違えられたのどの出っ張りは、旧約聖書・創世記に登場するアダムスのどにつかえた禁断の木の実として意味づけられました。

このように、私たちのからだには仏身が宿り、ギリシャ神が頭を支え、「世界で最初の人間」の痕跡を残しています。三つの宗教文化に彩られたかけがえのない私たちのからだを、無駄にすることなく大切に活かしていきたいものです。

【附記】

追ってアトラスと仏舎利の模型を瑞應寺受付に置いていただきますので、参拝の際にご覧いただけます。



図6

アトラス(第一頸椎)が載ったまま、仏舍利(第二頸椎)が出来た時は、アトラスを袈裟に見立てて崇めていたようです(図6)。

『骨の逸話』 国分正一 東北大学医学部整形外科名誉教授
<https://www.ortho.med.tohoku.ac.jp/anecdote.php>

【舍利】 遺骨、遺体を意味するサンスクリット語「シャリーラ」の音写。特に仏や聖者の遺骨を示すことも。

テレホン法話(〇八九七四一〇〇三三)

禪のたより



◆自然災害の増えたこの国で

今年は元日から大変な災害が発生し、被災された皆様には心よりお見舞い申し上げます。

平成三十年に発生した西日本豪雨災害の際には私の地元、広島県にも全国各地からご支援いただき、励ましていただきました。その時の恩返しができればと様子をうかがっておりましたが、全国曹洞宗青年会からボランティアに参加できたのは三月に入ってからのことでした。発

生から二ヶ月が経過していましたが、まだ水が出ず、トイレも使えない状況であり、災害の深刻さ、また水害とは違った復旧の難しさを感じました。

もう一つ大きく様子が違うと感じたのは、ボランティアに対する現地の方の警戒心でした。私が直接そのような様子を見たわけではないのですが、私より早く現地に入り、聞き取りや炊き出しの手伝いをしていた青年会の方、同時期に参加して別行動だった方からそのような話を伺いました。その理由の一つは、ボランティアに来ていた人が、現地で窃盗をしていたり、ブルーシートをかけて法外な値段を請求する悪徳業者がいるというようなニュースが多かったことであろうかと思えます。勿論、実害がある以上警戒は促すべきだとは思いますが、その裏で一生涯懸命頑張ってくださる方々の様子が霞んでいくのは寂

しいことです。

広島島の災害の時には、本当に様々な方に助けていただきました。ニュースを見て東京から駆けつけてくださった方、以前広島から助けに来てもらったから恩返しにと、団体で駆けつけて下さった倉吉市の方々、大好きだったおばあちゃんの実家があったからと大阪から来てくれたいた大学生、先の阿蘇の災害で同級生を亡くした大学生。皆さんの姿に救われた経験があったからこそ、私も人の助けになればと思えるようになったのだと思います。

日がたつにつれ、ニュースには取り上げられなくなり、徐々に関心も薄れ、人手が不足してきているとききます。

災害が発生したときに、人の隙を窺うのではなく、人の助けになることを願う人の姿を見習っていきけるよう、またそれを次の世代に繋げられるよう、僅かな力であっても、これからも支援を継続していきたいと思えます。

瑞應寺専門僧堂知殿 古川承久
令和六年六月一日〜十日



般若入

五月下旬より、当地区恒例行事である「般若入」を厳修。作付けの時期に合わせて地域の五穀豊穡・家内安全・身体健全を祈願した。



六月の日鑑

- 一日 祝禱
- 二日 日曜参禅会
- 四日 護持会総会
- 四日 参玄会(六日迄)
- 十五日 祝禱・略布薩
- 十八日 観音講・勉強会
- 廿日 略布薩

七月の予定

- 一日 祝禱
- 二日 大慈通元大和尚小祥忌速夜法要
- 三日 大慈通元大和尚小祥忌正當法要
- 七日 日曜参禅会
- 九日 参玄会(十一日迄)
- 十五日 祝禱・略布薩
- 十八日 観音講・勉強会
- 廿一日 略布薩



鐘声

光陰矢の如しというお示しがありますが、濃密な修行道場での暮らしも気づけばあつと言う間に二年目の夏を迎えました。

本年は昨年の小祥忌法要に引き続き先々住である大慈通元大和尚様の遺された威徳を肌で感じつつ、この歴史深き禅林で実り豊かな制中を修行できるよう、今一度発心し精進して参ります。

今夏首座

瑞應寺専門僧堂

安居者募集

安居を希望される方には、掛塔志願書を送付致しますので、左記にご連絡下さい。

愛媛県新居浜市山根町八一
電話 (0897) 411-6563
FAX (0897) 401-3127

